







4.3.3 歴史的領域 / 歴史的建築

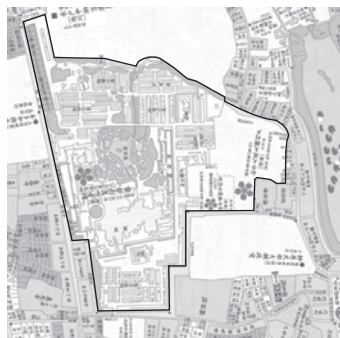
大学キャンパスは周辺地域の変化に比べて、持続的な領域 / 建築として存在していることをここでは明らかにする。本節では、歴史的変化を見るため、1949 年以前にできた 7 つの大学キャンパスを対象にする。時代区分としては、江戸期 / 1880 年代 / 1900 年代 / 1940 年代 / 1970 年代 / 現在に関して周辺地域と大学キャンパスの変化を見て見ることとする。

図 42 大学キャンパス敷地 / 建築の歴史的変遷

 キャンパス領域	 1880 年代建築	 1900 年代建築
 1940 年代建築	 1970 年代建築	 2000 年代建築

東京大学 本郷キャンパス (1877)

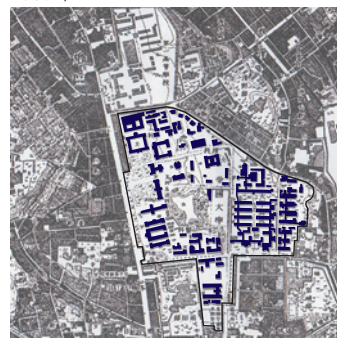
江戸期



1880 年



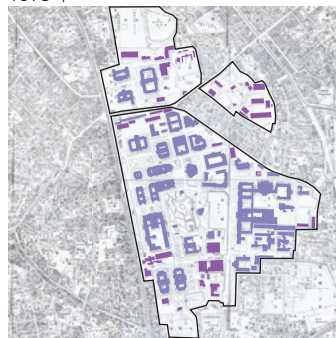
1909 年



1945 年



1973 年



2006 年



1996 年 柏キャンパス開設

早稲田大学 西早稲田キャンパス (1920 年)

江戸期



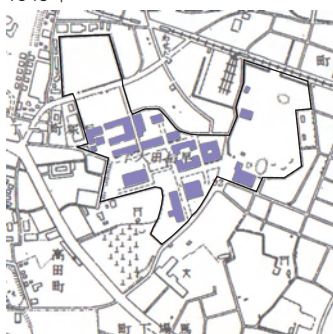
1880 年



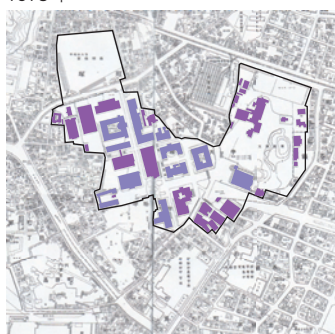
1909 年



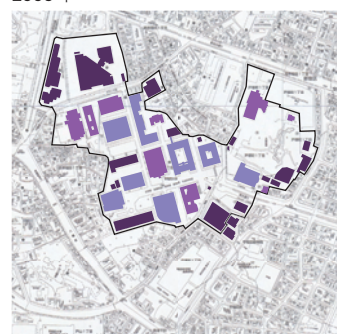
1945 年



1973 年



2006 年



1962 年 戸山キャンパス開設

1965 年 大久保キャンパス開設

1987 年 所沢キャンパス開設

青山学院大学 青山キャンパス (1949 年)

江戸期



1880 年



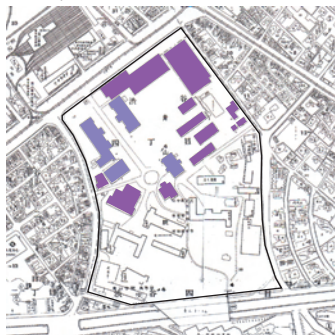
1909 年



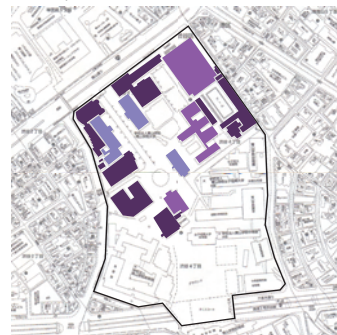
1945 年



1973 年



2006 年



1965 年 世田谷キャンパス開設

1982 年 町田キャンパス開設

2003 年 相模原キャンパス開設
世田谷・町田キャンパス閉鎖

慶應義塾大学 三田キャンパス (1890)

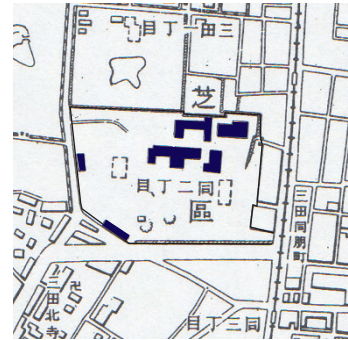
江戸期



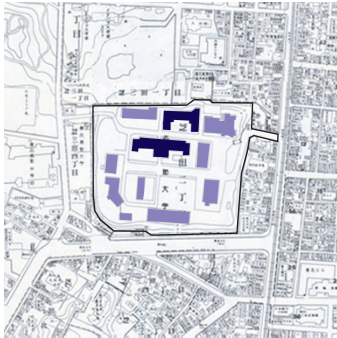
1880 年



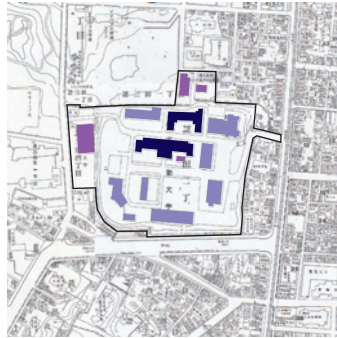
1909 年



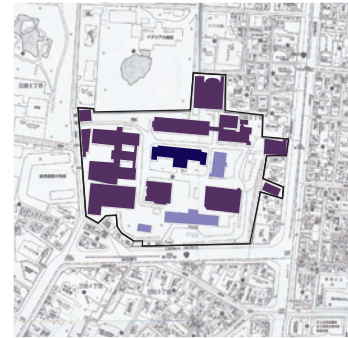
1945 年



1967 年



2006 年



1934 年 日吉キャンパス開設

1990 年 湘南藤沢キャンパス開設

上智大学 四谷キャンパス (1928)

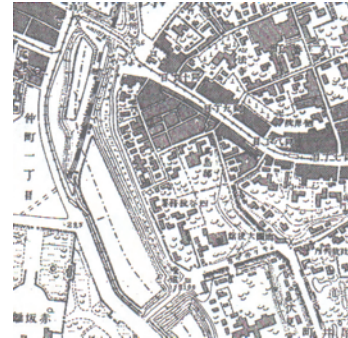
江戸期



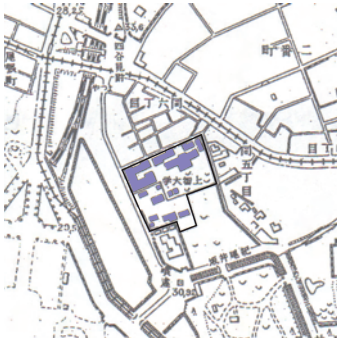
1880 年



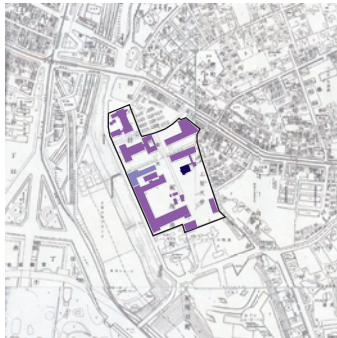
1909 年



1945 年



1973 年



2006 年



法政大学 市ヶ谷キャンパス (1928)

江戸期



1880 年



1909 年



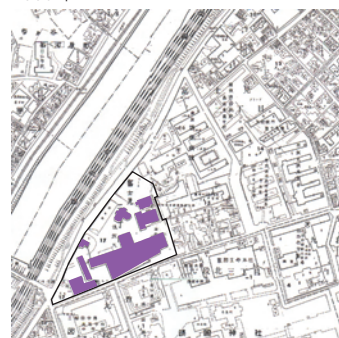
1945 年



1967 年



2006 年



1984 年 多摩校舎開設

明治大学 駿河台校舎 (1920)

江戸期



1880 年



1909 年



1945 年



1934 年 和泉キャンパス開設

1973 年



1951 年 生田校舎開設

2006 年



■江戸を引き継ぐ領域

まず、大学キャンパスの敷地領域に関してみると、東京大学本郷キャンパス、青山学院大学青山キャンパス、慶應義塾大学三田キャンパス、上智大学四谷キャンパスの4つが江戸時代と変わらぬ敷地領域をしていることが分かる。これらはかつて大名屋敷であった場所であるが、明治期に入ってそれらが政府に払い下げられ、大学がその敷地を買い取ったのである。このように大学キャンパスが江戸期の領域を引き継ぐ歴史的な領域であることが分かる。

■70年近く残る建築

次に、大学キャンパスの建物変化を見てみると、1900年代と1940年代の間で建物が多く建て変わってしまっていることが分かる。これは1923年に起きた関東大震災により、多くの大学キャンパスの建物が焼失してしまったためである。その特徴的な例は、東京大学本郷キャンパスである。震災後建物のほとんどが焼失してしまい、その後内田祥三によってゴシック風の建物がつくられ、それ以前とは全く異なる大学キャンパスが出来上がっていることが見て取れる。しかし、その後を見れば明らかなように、現代まで内田祥三設計の建物がキャンパスに数多く残っており、70年近く建築が残っていることが分かる。

他のキャンパスを見ると、建て増し余地の少ないキャンパス程建て替わってしまっている場合が多いが、明治大学駿河台キャンパスを見ると、以前の建物の形態を残しながら建物が建替えられており、歴史を継承しようとする意思が感じられる。

これまで見てきたように、大学キャンパスは周辺地域の変化にも関わらず、歴史的な領域／歴史的な建築を残していることがわかった。これは、大学キャンパスが持つ持続性という文化的価値であると言えるだろう。

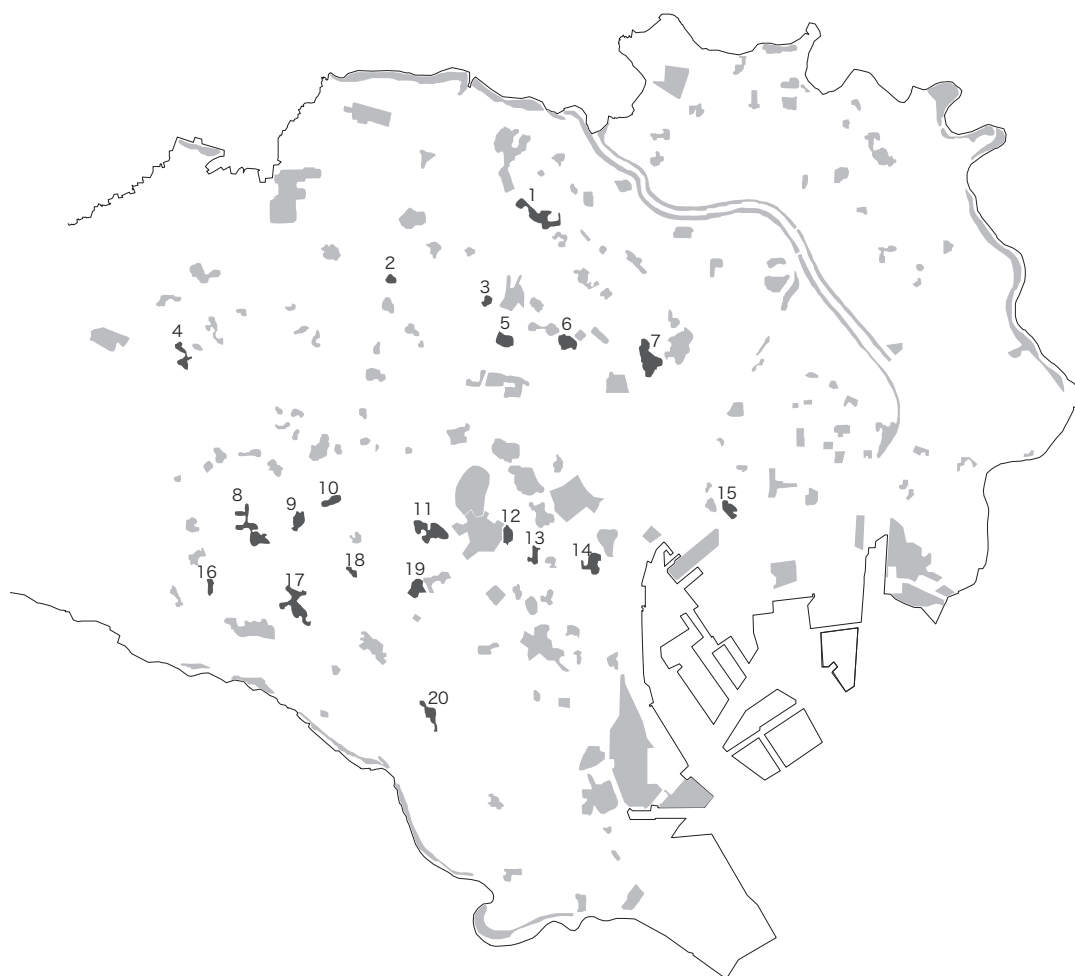
4.4 社会的価値

本節では、大学キャンパスが周辺地域に果たしている社会的な機能としての価値を明らかにする。

4.4.1 避難所

東京において、防災施設は災害時のために必要不可欠なものであるが、大学キャンパスは避難所として大きな役割を果たしている。それを示すために、以下に避難所の分布と、施設種類別の避難所数を示す。

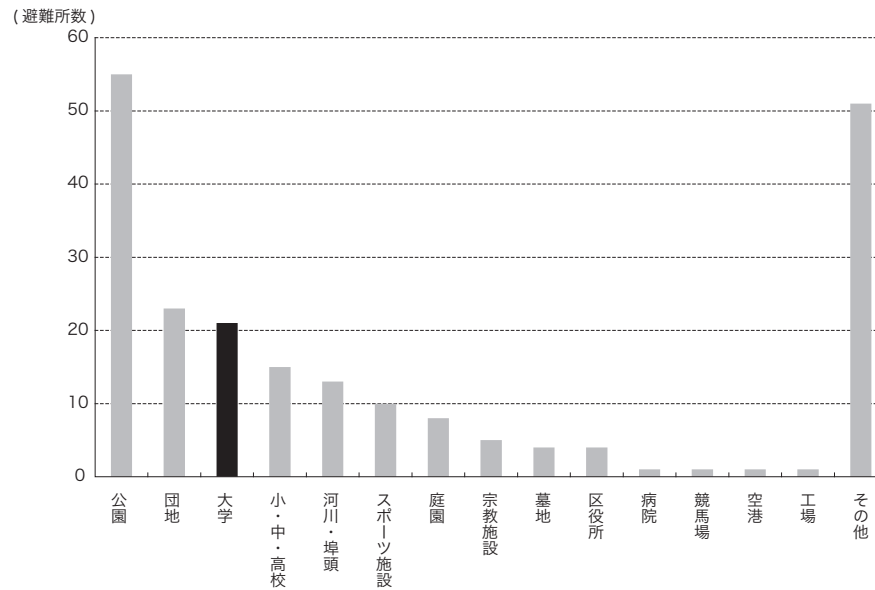
図 43 広域避難所の分布



広域避難所の大学

1. 東京家政大学 2. 武蔵大学 3. 立教大学 4. 東京女子大学 5. 学習院大学
 6. お茶の水女子大学 7. 東京大学 8. 明大八幡山グラウンド 9. 日本大学文理学部 10. 明大和泉校舎
 11. 東大駒場キャンパス 12. 青山学院大学 13. 聖心女子大学 14. 慶応大学 15. 東京商船大学
 16. 成城学園 17. 東京農業大学 18. 国士舘大学 19. 昭和女子大学 20. 東京工業大学

図 44 施設別広域避難所数



施設別広域避難所数を見ると、当然のことながら公園が最も広域避難所としての役割を果たしている数が多いが、大学キャンパスは団地に続いて3番目に位置しており、広域避難所として重要な役割を果たしていることがわかる。

このように、大学キャンパスは都市において避難所としての役割を大きく占めていることが分かった。これは、大学キャンパスの持つ文化的価値の防災性であると言える。

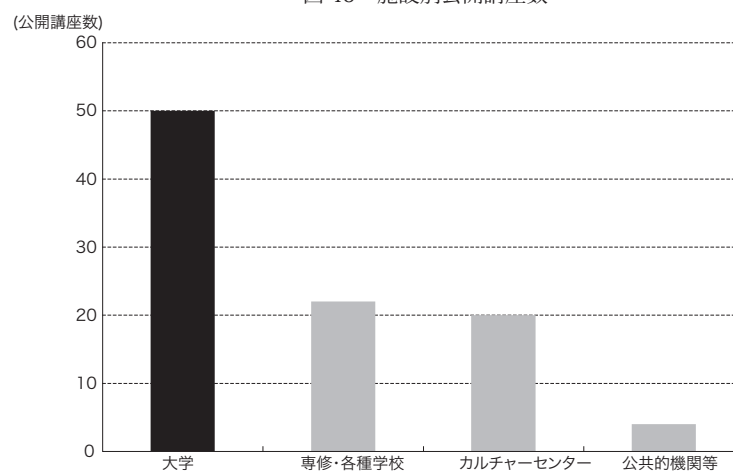
4.4.2 生涯教育

大学キャンパスは、大学生のための高等教育機関として存在しているわけであるが、それに留まらず、一般市民にとっての生涯教育の場としての役割を果たしているという側面も見逃してはならないだろう。

■公開講座

生涯教育の場としての大学キャンパス機能の中で広くなされているのが、公開講座だと考えられる。東京都のHPで紹介されている公開講座を行っている施設の数を見てみると分かるように、大学が大きな割合を占めており、地域住民にとっての教育の場となっていることが分かる。

図 45 施設別公開講座数



公開講座の内容としても、高等教育機関である大学が行うものであるため、レベルも高く、また他の施設が行う公開講座が有料である場合が多いのに対し、無料で受講できるという点も地域住民にとって利用しやすいものとなっているといえる。

■文化施設

また、大学キャンパスには多くの文化施設が存在しており、閉鎖的な大学キャンパスにあって、地域住民にとっては広く利用しやすいものである。そのため、第3章で大学キャンパスのイメージについて見た時にわかったように、文化施設としての大学キャンパスのイメージは多く評価に上がっている。一例として、「住宅情報ナビ 気になる街の暮らしレポート」で取り上げられているものをここでは紹介することにする。

図 46 文化施設事例



①東京大学 / 小石川植物園



②東京農業大学 / 食と農の博物館



③東京海洋大学 / 明治丸



①東京芸術大学 / 美術館



②東京大学 / 東大農場



③玉川大学 / 玉川学園購買部

例えば、東京大学であれば小石川植物園が、「散歩の達人 東京都心さんぽ」でも紹介されており、また田無にある東大農場も、地域住民に利用されていることが分かる。また、東京農業大学の「食と農の博物館」や東京海洋大学の「明治丸」、東京芸術大学の美術館等、大学の特性を生かした施設があり、地域住民にとっては大学の活動を知ることができる貴重な施設であると言える。また、玉川大学の購買部など商業的な施設も地域住民が気軽に使える施設であると言える。

ここに紹介した施設に留まらず、早稲田大学の演劇博物館や日本大学のカザルスホール、上智大学の聖イグナチオ教会等、博物館やホール、ミッション系の大学においては教会などが数多く存在している。

■コミュニケーションセンター / エクステンションセンター

今まで紹介してきた大学キャンパスの機能に留まらず、幅広く大学の活動を地域に広めるものとして、コミュニケーションセンターやエクステンションセンターが存在する。Yahoo の社会教育、生涯学習の施設の分類に紹介されているエクステンションセンターとして、

- ・日本女子大学生涯学習総合センター
- ・多摩大学ルネッサンスセンター
- ・早稲田大学エクステンションセンター
- ・法政大学エクステンション・カレッジ
- ・和光大学オープンカレッジパイディア
- ・東洋大学エクステンションセンター
- ・大東文化大学地域連携センター
- ・桜美林大学オープンカレッジ
- ・文京学院大学生涯教育センター
- ・東京理科大学生涯学習センター
- ・芝浦工業大学生涯学習センター

などがある。

また、エクステンションセンターに留まらず、東京大学の広報施設やコミュニケーションセンターなど、地域住民に大学キャンパスを知ってもらうための施設が増えてきている状況であると言える。

■地域連携

さらに数少ない例ではあるが、中央大学の多摩地域におけるネットワーク多摩の取り組みや、一橋大学のまちかど教室など、地域における街づくりを大学キャンパスが他機関と連携して行うようになっているのも、大学キャンパスの重要な役割であると考えられる。

これまで見てきたように、大学キャンパスは公開講座、文化施設、コミュニケーションセンター/エクステンションセンター、地域連携という4つの生涯教育の場としての機能を持っていることがわかった。これは、大学キャンパスが持つ文化的価値の地域交流性であると言える。

4.4.3 異文化性

昨今でこそ、大学キャンパスは学校面積を確保するために高層化、テナント化し、オフィスビルと変わらぬ姿をもつものが多くなったが、2.2 歴史で述べたように、大学キャンパスは外国からのキャンパス形式の輸入による異文化性を表象するものとして存在してきた。

■西洋の導入

次ページに示すように、1900 年前後から 1940 年頃に至るまで、大学キャンパスは西洋の様式を模した建築をつくってきた。

『日本の近代建築(上)―幕末・明治編』によれば、洋風建築は江戸末期の開国から長崎や横浜に現れ始め、技師たちの努力により西洋の技術が導入され始める。しかし、それは和風と洋風を合わせた擬洋風と呼ばれるようなものであり、西洋の正統的な様式建築には及びもつかないものであった。その後、明治に入り、文明開化の名の下に、西洋の建築様式の輸入が大々的に始まる。その代表的なものとして、日本政府の御雇建築家の登場があるわけだが、これにより日本の建築は西洋の技術だけでなく、様式を導入するようになる。その時につくられたのが、官庁建築や学校建築、銀行建築などであった。そして、御雇建築家では満足できなくなり、日本での建築教育をすすめるために、大きな役割を果たすことになったのが、工部大学校造形学科の教授になった J・コンドルであった。J・コンドルは日本の“建築界の母”と呼ばれているように、教育面での日本の建築の技術を促進し、西洋の様式を日本の工部学生に教え、建築家へと育て上げていった。

このように、大学は西洋の建築を導入する実験場であっただけでなく、それらをつくる建築家達の養成所でもあった。明治 21 年に工科大学校をヴィクトリアン・ゴシックで設計した辰野金吾や、明治 45 年に慶応義塾創立五十年記念図書館をチューダー・ゴシックで設計した中條精一郎など、当時の様式の最先端を取り入れながら大学キャンパスがつくられていった。

しかし、大学キャンパスは新たな建築様式の導入の場であったが故に、時代の流れとともに、モダニズム建築を受容し、ポストモダニズム建築や流行的な現代建築をつくるようになってきた。それは、最先端の建築が公共建築から商業建築や住宅建築へとシフトしていったこととも大きく関連するが、大学キャンパスは次第に周辺建築物と変わらぬものとなっていった。しかし、日本における建築家の萌芽期に大学建築がつくられ、それらが今もなお残っていることは、周辺地域における大きな遺産であると言える。

■西洋を表象する要素

大学キャンパスはこれまで見てきたように西洋を表象するものとしてつくられてきた。そこで、ここでは大学キャンパスの特徴的な西洋性を表象する要素を取りあげる。基本的に大学キャンパスの建物全体が西洋の様式を持ってつくられている場合が多いが、周辺地域に対して分かりやすい形で顕われているものをとりだして紹介することとする。

大学キャンパスには多くの塀があり、タイルが貼られており、日本的な石垣の塀やコンクリート塀とは違って西洋性を表象している。また、門においては、大学キャンパスの出入り口であるため、アイコン的要素が強くあらわれている。そのため、単に西洋風の門だけでなく、門型を

した建物等によって西洋性が強調されている。

さらに、特徴的なものとして時計塔が挙げられる。学校建築には時計が置かれる場合が多いが、塔型をしているものはそれほどなく、大学キャンパスに置かれる時計塔はアイコン性の強いものであると言える。都市においても、代々木にあるドコモタワーや銀座のワコエなどの建物に時計が置かれているが、数は少ないと言える。

図 47 西洋を表象する要素の事例

塀



①青山学院大学青山キャンパス



②東京大学本郷キャンパス



③東京芸術大学

門



④東京大学本郷キャンパス正門



⑤聖心女子学院正門



⑥慶應義塾大学
三田キャンパス

時計塔



⑦一橋大学



⑧東京大学本郷キャンパス



⑨東京大学駒場キャンパス



⑩首都大学東京南大沢



⑪早稲田大学



⑫国士舘大学

図 48 異文化性を表象する建築

1900 年代以前

1. 東京大学赤門 / 1827
旧加賀藩主前田家

2. 慶應義塾大学演説館 / 1875

3. 東京芸術大学
赤煉瓦 1 号館 / 1880
林忠恕4. 東京芸術大学音楽堂 / 1890
山口半六、久留正道

7. 上智大学クルトゥルハイム / 明治期

1900 年代

5. 日本女子大学成瀬記念講堂 / 1906
田辺淳吉6. 聖心女子学院正門 / 1909
ヤン・レツル

1910 年代

8. 東京大学正門 / 1912
伊東忠太9. 慶應義塾大学図書館 / 1912
宮瀬達蔵・中條清一郎
チューダー・ゴシック風10. 清泉女子大学
旧島津公爵邸 / 1915
J. コンドル
イタリア・ルネサンス風11. 明治学院大学礼拝堂 / 1916
W.M.ヴォーリス12. 立教大学モリス館 / 1918
マーフィ・アンド・ダナ
チューダー風

1920 年代

13. 星薬科大学本館 / 1924
アントニン・レーモンド14. 東京大学大講堂 / 1925
内田祥三・岸田日出刀
ゴシック風15. 早稲田大学図書館 / 1925
今井兼次
北欧風16. 早稲田大学大隈記念講堂 / 1927
佐藤功一・佐藤武夫
ゴシック風17. 一橋大学兼松講堂 / 1927
伊東忠太
ロマネスク風18. 学習院大学南 1 号館 / 1927
宮内省19. 青山学院大学岡島記念館 / 1929
清水組20. 駒沢大学耕雲館 / 1928
菅原栄蔵21. 東京芸大陳列館 / 1929
岡田信一郎

1930 年代

22. 東京女子大学本館 / 1932
アントニン・レーモンド23. 青山学院大学法人本部 / 1931
清水組24. 津田塾大学本館 / 1931
佐藤功一25. お茶の水女子大学本館 / 1932
文部省26. 東京海洋大学 1 号館 / 1932
文部省、大蔵省

1940 年代

1950 年代



27. 津田塾大学図書館 /1954
丹下健三
モダニズム



28. 法政大学・大学院,
55 年館,58 年館 /1955,58
大江宏
モダニズム

1960 年代



29. 立教大学図書館 /1960
丹下健三



30. 学習院大学中欧教室 /1960
前川国男

1970 年代

1980 年代



31. 東京工業大学百年記念館 /1987
篠原一男



32. 東京大学法学部 4 号館 /1987
大谷幸夫

1990 年代



33. 東京造形大学 /1993
磯崎新



34. 東京芸術大学美術館 /1999
芸大施設課、六角工房
日本設計

2000 年代



35. 東京大学駒場 II
リサーチキャンパス /2000
原広司



36. 二松学舎大学 /2004
香山寿夫



37. 東京大学環境棟 /2006
日本設計・大成建設 JV



38. 成蹊大学図書館 /2006
坂茂



39. 多摩美術大学図書館 /2007
伊藤豊雄

■異文化性を表象する大学キャンパス

以上、大学キャンパスが西洋性を表象するものとして存在することを明らかにしてきた。しかし、日本の大学の前身である湯島聖堂(昌平坂学問所)が中国風の様式を導入しているように、学問施設というものが異文化の導入によって存在してきたことを考えれば、大学キャンパスが西洋を中心としながらも、より広い意味での異文化性を表象するものであったといえる。

これまで見てきたように、大学キャンパスが異文化性を表象する要素を持っていることが分かった。これは、大学キャンパスが持つ文化的価値のアイコン性であると言える。

4.5 まとめ

今まで見てきたように、本章では大学キャンパスの持つ文化的価値を明らかにしてきた。本節では、それらをまとめることにする。

■学生街性

4.2.1 で既往の文献を参照しながら、学生街の衰退メカニズム、学生街の領域、学生街成立の構造をまとめ、東京大学本郷キャンパスの 400m 圏内での商業立地の変化を見ることで、居住と商業の関連性を指摘してきた。本来は詳細な居住変化を見なければ、学生居住と商業立地の関連性を論理的に説明することはできないが、商業立地にとって学生の居住が大きな要因をなしていたであろうという可能性を示すことは問題ないであろう。

本節では、この商業立地があらわれるという波及的価値を明らかにすることで、大学キャンパス周辺の学生街的性格を明らかにしてきたと言える。

■自然名所性

4.3.1 では、大学キャンパスが数多くの並木・大樹・庭園などをもっていることを明らかにし、それらがメディアや行政などの第三者によって評価されていることを明らかにしてきた。これはつまり、大学キャンパスの持つ自然名所的性格を明らかにしてきたと言える。

■オープンスペース性

4.3.2 では、都立の公園と大学キャンパスの空地面積を比較しながら、大学キャンパスが大規模公園に匹敵するだけの緑地や空地を持つことを明らかにしてきた。これはつまり、大学キャンパスの持つオープンスペース的性格を明らかにしてきたと言える。

■持続性

4.3.3 では、周辺地域が変化しているにもかかわらず、大学キャンパスの領域 / 建築が長く残っていることを明らかにしてきた。江戸期の大名屋敷を受け継いで敷地領域を形成しているものや、震災後 70 年近く建ち続けている建築など、歴史的領域、歴史的建築を持っていることがわかった。これは大学キャンパスの持つ持続的性格であるといえる。

■防災性

4.4.1 では、大学キャンパスの多くが避難所として認定されており、他の施設と比較しても大学キャンパスが比較的重要な位置を占めていることがわかった。これはつまり、大学キャンパスの持つ防災的性格であると言える。

■地域交流性

4.4.2 では、大学キャンパスが生涯教育の場として機能していることを、公開講座、文化施設、コミュニケーションセンター / エクステンションセンター、地域連携について説明しながら明らかにしてきた。これはつまり、大学キャンパスが持つ地域交流性を明らかにしてきたと言える。

■アイコン性

4.4.3 では、大学キャンパスが異文化性、特に西洋性を表象する建築を持っており、塀や門や時計塔といったものに特に異文化性が見て取れることを明らかにしてきた。これはつまり、大学キャンパスの持つアイコン的性格を明らかにしてきたと言える。

これらをまとめると以下のような図になる。

図 49 大学キャンパスの文化的価値

価値	機能	性格
波及的価値	商業立地	学生街性
空間的価値	並木 / 大樹 / 庭園	自然名所性
	緑地 / 空地	オープンスペース性
	歴史的領域 / 建築	持続性
社会的価値	避難所	防災性
	生涯教育	地域交流性
	異文化性	アイコン性